

話題

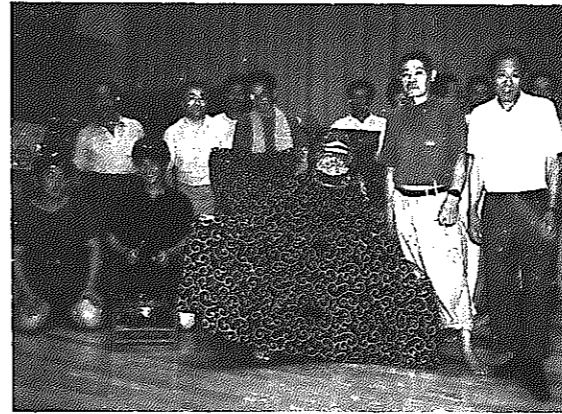
ま ち の

20年ぶりに伝統復活 生涯学習で地域おこし 庚部落 神楽舞

庚部落に百四、五十年前から伝わる神楽舞。昭和四十四年に境に姿を消してしまいましたが、約二十年前に復活しました。若手で作る庚神楽舞保存会(斎藤義雄会長)は会員十五人。毎週一回、勤めの後に練習を重ねています。

神楽舞は悪魔払いの踊りとして結婚式などで踊られていました。しかし兼業農家が増え、若手の多くが勤めに出るようになってからは自然消滅。獅子頭は壊れたままほこりをかぶっていました。

神楽舞復活の話が持ち上がったのは、地域の生涯学習推進連絡会議で。「庚にだけ伝わる神楽舞が、このままでは永遠に消える」と、



部落を挙げて取り組むことになりました。若手有志で保存会を結成。獅子頭は修復され、うるしの香りがするびかびかの獅子頭に生まれ変わりました。さらに古老の歌う神楽舞の歌をテープに取り、歌詞を起こします。しかし昔からの歌だけに言葉が不明瞭で、何度も何度も聞き直し。寝ても覚めても頭の中を歌が駆け巡ったといいます。

神楽舞は、踊り手、すそ持ち、太鼓、歌い手の四人一組で演じます。ユニークなのは、すそ持ちが腰にニンジンで作った男性のシンボルを下げて踊ること。結婚式のときは、最後にそれを箱に入れ、花嫁に差し出します。神楽舞の練習を見に来ていたお母さんは、「結婚式では驚きました。笑うに笑えず、下を向いて笑いをこらえていました」と当時を振り返ります。

練習は夜十時過ぎまで。舞いを指導する川田次郎さんは首の振り方や足の運びなどを付きつきりて伝授。川田弘区長は「神楽舞の復活を機に、部落のまとまりができました。年配者と若手が一緒になって取り組み、親睦も図れます。地域づくりにもなり、これが本場の生涯学習です」と話します。

初演は十月四日の地区敬老会。恥ずかしいものを披露したいと、汗だくの練習が続いています。

母校「響くピアノの響く」 小杉真二さん ピアノ演奏会

新進ピアニストとして注目を集めている小杉真二さん(大阪芸術大三年)が、七月二十一日母校・新飯田小で華麗な演奏を披露しました。演奏会は、地区青少年育成協議会の要請に小杉さんがこたえ表現したもの。

新飯田小・中学生全員と多くの地域住民が会場を埋める中「ソナタ第五番」や「エリーゼのために」などを披露。小杉さんは「今日使ったピアノは、自分が小学生のとき入ったもの。ピアノ開きの演奏会を見て、自分もこんな演奏会ができたかと思っていました。夢が実現し、うれしく思います」と話していました。



電話術とクイズで交通安全 大通地区 公民館

夏の交通安全運動期間中、八月四日には新飯田区内で交通安全指導所が、十日には大通地区公民館で交通安全教室(写真)が開かれました。

交通安全指導所は、滝沢市長をはじめ市交通安全協会、白根警察署など約三十人が、道行くドライバーに交通安全を呼び掛けました。

交通安全教室は大通小の児童に、県警本部が指導。最新鋭の交通安全教育車「ゆきつばき号」も目見え。交通安全巡視員の女性二人が電話術とクイズで、交通ルールやマナーを子供たちに楽しく教えたほか、交通事故の模擬実験などを行いました。



みんなで協力して行動 サマーチビ

青年教育センターなどが主催した「サマーチビ大学」が七月二十八日から二日間、五頭連峰少年自然の家で開かれました。チビ大学は自然の中で、共同生活の楽しさを体験し、連帯感を培うのが目的。市内小学校十校の五、六年生四十七人が参加しました。

沢登り、野外炊飯、きもだめし、ニジマスのつかみ捕りなどを体験した子供たち。「友達がたくさんでき、みんなで協力して行動できた」「今まで経験したことがないことを経験できた」と感激の様子。自然を満喫し、大満足の二日間でした。



ニユースポーツを体験 ジュニア・サマー スポーツスクール

夏休みのひとときを、ニユースポーツなどで楽しんでもらおうと、カルチャーセンターでは八月三日から五日間「ジュニア・サマー・スポーツスクール」を開催しました。スクールには小学校三、四年生の児童三十五人が参加。グラウンドゴルフ、ゲートボールなどを楽しみました。

初日の三日はグラウンドゴルフ。ルールはゴルフと同じで、木のステイクで木のボールを打ちます。最初はコントロールがでず、右往左往の子供たち。慣れるに従って「カキーン」という快い音と歓声が、催し物広場を包んでいました。



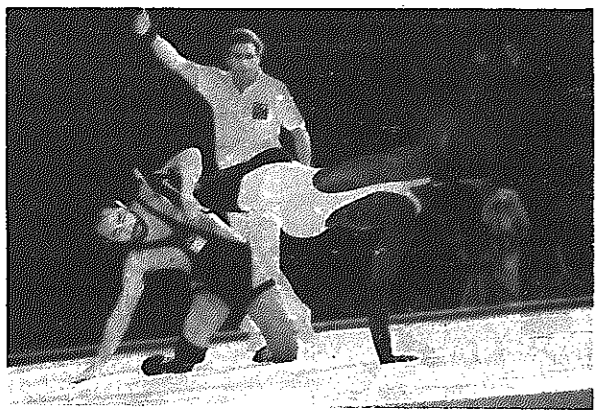
原 喜彦選手

健闘むなしく失格

バルセロナ五輪 レスリング・フリー

バルセロナ五輪・レスリングフリースタイル74kg級に出場した原喜彦さん(上浦出身・二十八歳・新潟北高校教諭)は、四回戦終了後の計量を受けなかったため、残念ながら失格となってしまう。予選を三勝一敗とし、六位以内の入賞を決定していただけに、誠に悔やまれる結果となりました。

原さんは、六月二十八日日本市で行われた壮行会で「メダルを取る」と宣言したとおり、予選を好調に勝ち上がりました。一回戦では、強豪と目され前評判の高かったサラス選手(コロンビア)にテクニカルフォールで圧勝。二回戦のラ



ブシャーニ選手(南アフリカ)には七対一の大差で勝ち、三回戦のホームズ選手(カナダ)には、十対八と接戦をものにしました。続く四回戦は、朴章洵選手(韓国)に十対十二で惜しくも敗れましたが、この段階で六位以内を決定。展開によっては、金メダルの望みも残っていました。

「失格」は、新潟から世界を目指した原さんの苦しい四年間の努力をまったく無にした、非常に悲しい過酷な結果でした。テレビのインタビュで原さんは「この四年間はいつた何だったのか」と言っつて声を詰まらせた。応援に駆け付けていた、両親や奥さんの心中を察するに余りあります。

しかし、原さんの活躍は市民を大いに沸かせてくれました。子供たちには身近な手本として「努力すればオリンピックに出れる」という夢を、与えてくれたものです。バルセロナ五輪では大変残念な結果となりましたが、原さんの今後の健闘を期待します。

▲一回戦でサラス選手に圧勝し、好調なスタートを切った原選手だったが……